

現在、著者のラボで見られる昆虫はカブトムシ、クワガタムシ、コガネムシの他にカミキリムシ、意外なモノとしては蛍が挙げられる。地方都市といつても、その都会化するには凄まじいものがあり、街中で蛍等を見かけることはまるで常事であるまい。

まして、孫の住む東京で、これらの虫たちを手ずから捕まえる経験等ありようもない。その昔の日常であつた昆虫との接触も、多くは商売化されたストーリーの元で子供たちの情操教育を与えたといいう大人的思惑で行われている。

子供の成長は早く、六年前には全くの白紙であつたその脳に、虫たちの成長を確認するほどの高度な知識が蓄積されてきている。「自分のカブトムシの幼虫が一番先に成虫になつたんだよ」と母親に自慢していいたらしい。幼虫が成虫へ変体することを、飼育を通して学んでいることは、教育の成果である。

最近の子供を取り巻く環境は著者の幼いころとは別世界であり、わが孫について

もYouTube等を通して、「鬼滅の刃」や「ポケットモンスター」の世界に浸り込んでいた姿をみると多かった。生まれた時から、YouTubeがあり、その環境下で繰り広げられる仮想の世界で、キャラクターと一体化した自分をヒーローとして参入させていけるのなら、それでいいのだろうか!? 等と感じることも多かつた。昨今、生きた昆虫と生活することに興味をもつている彼の姿は、大人の考えるよりも柔軟な感性ですべてを受け入れているのかもしれない。

著者のラボのある場所は、岳温泉という鄙びた温泉町のある福島県二本松市である。都市化の激しいわが国であつても、田畑や山郷に近い田舎であれば、まだまだ、自然に繁殖・生息している動物が少なくない。問題は「そのような生物に馴染もうとする心の喪失」という、人間側の変化であろう。

若い世界は刺激に対する嗜好性が高い。三十年以上前に家族で、ハイデルベルグという世界文化遺産に指定されているドイツの町を訪ねた。世

界の文化遺産であるから、町全体がヨーロッパの城とそれを取り囲む建物で満ち満ちてゐる。そこで乗つたタクシーの運転手が嘆いていた。「最近の若者は、こんな田舎町には興味がなくて、華やかな大都市へと流出してしまった。だから、この町も過疎化への道を歩んでいる」と。

日本に例えれば、奈良や京都に比肩する歴史町で、三〇年も前に、若者の流出が起きていた。(二〇三年前(コロナ騒動中)に、奈良を訪れた。久しぶりの奈良であつた。歴史で名高いこの町も、コロナ中とは言え、閑散としていた。歴史の町である奈良を大事に思う人々は少なくない。しかし、若者世界は刺激を求めて大阪エリアへ流出しているらしい。

自然界の魅力は都会の刺激的的魅力に比べると、若者世界を引き付ける力は強くない。刺激を求める若い世代を引き留めるには、自然界の魅力を重ね、刺激に対する免疫を得た世代である。このように年を重ねて、自然界の魅力に目覚めた人々が田舎へ移住

することはそう容易いことではない。易しくないから、大都會から田舎へ移住した人のことがテレビ等で紹介される。当たり前に行えるのなら、それを取り上げたテレビ番組等だれも見ないだろう。できることへの憧れで、家庭菜園を楽しむ人がいるのではないか? 今、カマキリにのめり込んでいるわが孫には、都會の喧騒と刺激への免疫と、六月の末に蛍が舞い飛ぶ、そして自分でかけたワナでカブトムシやクワガタムシを捉えられる環境で、双方への感受性をもつ人間へと成長して欲しい、と切望する。

中国出張から帰った翌日、孫が遊びに来た。先月は、Xショットという特別つぽいガン孙に、その前は進化型ベイゴマ・バイブレードに凝っていた。Xショットというガントル（銃）を駆使するヒーローが活躍する短編ドラマや、ユーチューバーという新種（とはいつてもすでに下降線をたどっているともいわれる）が自分を主人公として、単純な展開のドラマ風の演出がYouTubeで見られるし、また進化型ベイゴマ（バイブルード）は、遊ぶ方法は従来のベイゴマと同じ要領であるが、何しろ高額である。ちなみに铸物でできている（古典的）ベイゴマの価格は一〇個ほどで数百円あつたが、バイブルードでは一〇〇〇円ほどのモノが最低価格であ

り、高価なモノでは四、〇〇〇円から五、〇〇〇円もする。子供の購買欲を搔き立てて、高額な玩具を売り、それをゲーム化することでさらに市場を広げている点では、うまいものである（著書の感性では、必ずしも是とはしないが：）

そんな彼は、今日は「カブトムシ」「クワガタムシ」に興味津々となつてゐる。母親（著者の次女）が捕まえた小さなカマキリを虫籠に入れて、毎日何処へ行くにも持ち歩いて、毎日何処へ行くにも持ち歩いて、毎日何処へ行くにも持ち歩いている。このカマキリは彼の母親（著者の娘）が家へ迷い込んだところを捕まえたらしい。

『常に放し飼いにしている』といつて、テーブルの上に放し、ハムの切れ端と水を与えていた。カマキリもよくした

もので、小さなハムの切れ端にしがみついてひたすら食べている。その姿はまるでペツトさながらである。

その他にクワガタ虫も飼育している。このクワガタ虫は、著者のラボ（P P Q C）で、トラップに掛けたものである。三匹の雄と二匹の雌が同居している。彼は幼いころには花を始めとする植物が大好きで虫については、どちらかと言えば怖がっていた。六歳にもなると、色んな面で成長するものである。

昨今では、さまざまに昆虫が販売されているという。孫の通う幼稚園では「カブトムシ」の幼虫を、園児一人ひとりにツガイで与え、その生態を観察させているとのこと。これらの昆虫は、それぞれ納入業者から購入するらしい。

すべてが商売ネタとなつてゐる現在を改めて実感した。すべての昆虫類を自然のなかで見つけ、捕つては飼育したものである（もつとも、カブトムシ等については、毎日手に入れるため、敢えて飼育したことはない）。珍しいモノでは、玉虫がある。「玉虫の厨子（注）」で知られる、あの七色の輝きをもつ「玉虫」である。そういうえば、玉虫色の決着等といふ表現はいまでも使われる。本来の玉虫の色を知らずにこの表現を使つているマスクミ人もいるのではないだろうか？六〇年近く昔であつても、玉虫を捕まえることは滅多になかつたため、たまたま捕まえたら、まずは学校へもつていつて自慢の種にした

## 生き物を飼う

(株)PPQC研究所 加藤 宏光